

うわさ話になる。

三、自分の感じていること、考えていることを、ありのままに表現することである。飾らずに、これと言ったら皆からどう思われるか、という不安から解き放たれることである。

四、相手をそのまま受けとめることである。忠告、助言、議論、批判などは分かち合いにはむしろ妨げになる。

● 知識よりも感性の解放を

「感情」というテーマが四回続くことも、この講座の特徴であろう。入門講座と聞いて参加者が持っているイメージは「聖書の勉強」であり、あるいは知的な学習の場というものである。聖書やキリスト教の教義を講義されるというイメージを持って参加してくる。だからこの「感情」というテーマも意外な感じを与える。

信仰というものには、確かに知的な知識や理論も必要であろう。でもそれ以上に、実は感性の解放の問題であると私は思っている。これまでのカテキズムは知的な側面に偏っていたいなかったらどうか。信仰をあまり

に理屈で割り切ろうとしないなかったらどうか。「感情」というテーマを取りあげながらいつもそう考えてしまうのである。

● 神から愛されている自分に気づく

「自分を受け入れる」というテーマも、あるタイプの人を「回心」に導く。

このテーマの第一回目は、「自分がイヤになるとき、好きになるとき」。

まず「現代こき下ろし言葉辞典づくり」という作業から始める。続いて小さなカードを何枚か配り、「どういうときに自分がイヤになるのか」を一枚のカードごとに一ポイント書いてもらう。それを集めて全部そのまま読みあげる。

さらに今度は「自分が好きになるとき」ということを同じように繰り返す。

入門講座では人数が少ないのでこの作業はそれほどうけることはないのだが、高校の「倫理」の授業でこの作業をするとなぜか大うけである。「自分がイヤになるとき」のカードには、たとえば「鏡を見たとき」「体重計に乗ったとき」とか「パパとケンカしてパパ

をどなったらパパが落ち込んでしまった」というのが出てきて、読みあげるたびにどつと笑いとなるのである。「自分がイヤになるとき」という、本当だったら暗いテーマなのにこんなに大笑いしてしまうのはなぜだろう、と生徒に問いかけることにしている。

このテーマの第二回目は「自分を好きになるために」ということで、いくつかの文献を読む。

アントニー・デメロ著『小鳥の歌』より「変わってはいけない」という詩を読んで終わる。「神さまあなたはこんなやり方で私を愛してくださいっているのですね?」というところを読むと、いつも胸にこみ上げてくるものを禁じ得ない。感動的な詩である。

私の講座ではなく、昼間の講座でこんなことがあった。そこには重い障害を持った青年が参加していた。いつもやっと通ってきていたが、クラスではほとんど何も語らず、何を考えているのかわからなかったという。ところがこのテーマについてのクラスで、突然彼は不自由な言葉で、たどたどしく語りだした。

彼は今まで自分がこういう体で産まれてきたことを憎んでいた。親を憎み、他人をうらやみ、自分を蔑んでいた。でも、ここで初めてこんな自分でも神さま

に愛されているということを知ったというのだ。こういう自分だからこそ、その分、皆から愛されているということに気がついたというのである。

そして青年は、それからその講座には現れなかった。しばらくたって彼が亡くなったということを知った。

その担当者は涙を流して語ってくれた。「自分の生を憎み、親を怨んで死んでいくのと、最後にでもそれを受け入れて、そのような生を感謝して死んでいくのでは、それこそ天国と地獄の差がある。入門講座を担当して初めて『救われる』ということはどういうことかを実感できた」と。

〔次号につづく〕

（つちゃ・いたる／清泉女学院中学・高等学校教諭）

